

「おもしろい！」からはじまる探求活動

社会福祉法人芽豆羅の里 幼保連携型認定こども園 めずらこども園 大分県

ここが Point!

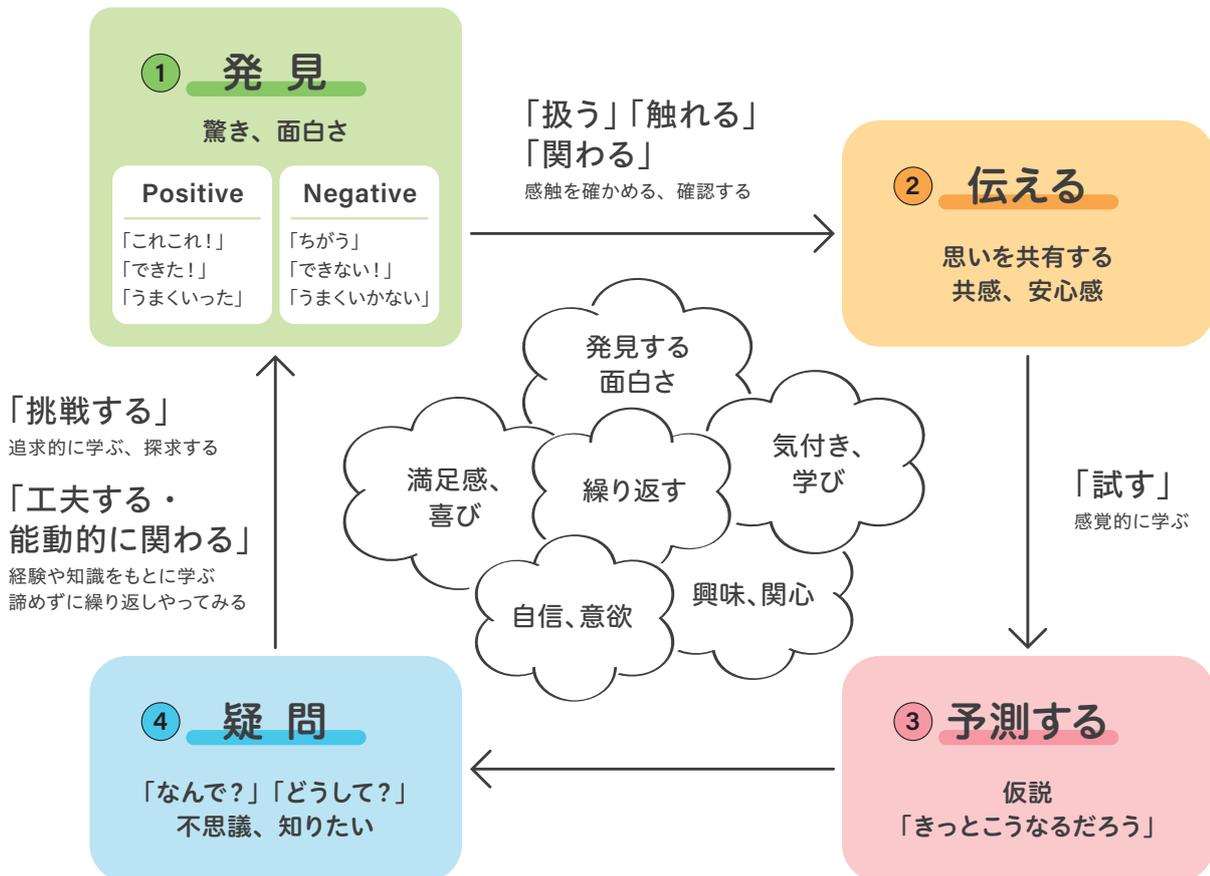
その子や各年齢なりの育ちに寄り添って発展する「探求プロセス」

水が飛び散る現象を「おぼけ」と呼んでその再現に没頭したり、偶然からはじまった「マル」探しを楽しんだりする1歳児たちの姿からは、彼らが見ている世界の面白さや広がりを感じることができます。先生方は、これまでの実践研究のなかで「探求サイクル」を見出し、発展させてきました。今回も、1歳児の探求が①～④段階で整理されています。しかし、子どもたちに寄り添うなかで、子どもの探求は必ずしも順番通りにはいかないこと、例えば①と④が同時に起こる場合もあり得ることに気が付いたといいます。子どもの経験や育ちを整理するとき、私たちは規則的なスパイラルやサイクルとしてまとめがちです。そこに、不規則性や不確実性をも尊重する視点を組み入れることで、よりその子や各年齢なりの「科学する心」の育ちが見えてくるかもしれません。

子どもたちは、目の前の出来事に興味津々で、偶然起きた現象その一瞬に夢中になり「面白い」「もっとやってみよう」と心が動き「きっとこうなるだろう!」と予測し、驚き、発見を繰り返しながら新しい学びを得ていることがわかった。このような経験を積み重ね心躍る好奇心に満ち溢れた姿が連鎖し次々と遊びの世界を広げていく。子どもたちの「科学する心」は、探求の扉を自分たちで押し開いたと考える。

1歳児の事例分析と考察の視点

結果を導き出すには難しい年齢の1歳児であるが、本園では年齢による探求においては、forest（敷地内の森）・読み聞かせ・手遊びなどにより子どもたちが主体性を持ち、自分で遊びを展開する日常がある。その中で、興味・関心が生まれた時には、必ずしも1歳児において①②③④の順番で子どもの脳裏に浮かんでくるものではないことを今回の事例の中で、改めて気付くことができた。



※文中の下線 ① 発見 ② 伝える ③ 予測する ④ 疑問 は前図を参照

園庭で遊んでいたほくとが蛇口から流れ出る水をカップに入れようとする。水の勢いが強く①カップの中から水が飛び散った。これを見たほくとは①「うわー！おぼけになった！」と大きな声をあげた。ほくとの声に驚きかなとが急いで側に寄って来るとほくとが得意気に②「いくよ！ほら！」と勢いのついた水道水がカップの中で飛び散る様子をやってみせた。かなとは①「うわー！」と飛び跳ねて喜び、③ほくとの持っているカップと似た形のものを探し、蛇口から出る流水に当てた。すると、①ほくとがかなとに見せた現象が起こり、二人で喜ぶ姿が見られた。



翌日、ほくとが昨日と同じ形のカップを持ち、③蛇口から出る流水にカップを当ててるが、昨日より水の勢いが弱いため、流水が飛び散らなかった。このことにほくとは④「あれ？おぼけにならないよ。」と不安な表情を見せ、③違う容器ならまた飛び散るのではと思い、昨日とは違う容器で試していた。しかし、④ほくとが求めている「おぼけ」の形にはならずほくとは「できないよ！」と涙を流して怒っていた。「できなくなっちゃったの？」とほくとの気持ちに寄り添うと、ほくとの気持ちが落ち



着き、もう1度蛇口に向かって行った。ほくとが再度蛇口に向かった時には蛇口の水が止まっていたため、ほくとがレバーを操作し、水を出した。そこに③1番初めてにおぼけを作ることに成功したカップを置いたが、水は飛び散らなかった。④「もう！できないよ！」と怒ったほくとが蛇口のレバーを更に強く押し、勢いが強くなった水がほくとの手に当たった。①ほくとは手に当たった水圧に「うー？」と声をあげ、③その流水にカップを当てると、流水はカップの中から飛び散り、ほくとが求めていた「おぼけ」が出現した。②「見て見て！」とほくとは周りの友だちや保育者に喜びを知らせていた。そこに、③ザルを持ったりりとほくとを真似るが、ザルだと水が通り抜けるため、飛び散らない。りくとはしばらく③ザルを流水の下に置いて様子を見ていたが、ザルを別の場所に持って行った。③次はバケツを持って蛇口にやってきた。バケツもほくとが作り出した「おぼけ」のような水の飛び散りがなく、④りくとは「ん！ん！」と少し怒った声をあげた。りくとは、周りを見渡し少し大きい浅めの皿を探して持ってきた。①その皿を流水に当てると流水が飛び散り「おぼけ」を作り出すことに成功した。りくとは満足な表情を見せ、何度も何度も足洗い場の蛇口の前で「おぼけ」を作り続けていた。



※文中の下線 ①発見 ②伝える ③予測する ④疑問 は前図を参照

場面1 牛乳の マル

おやつ時間にそらは牛乳の入ったコップを倒した。
①そらがコップを動かすと丸い形を見つけた。そらが
②「マル！マル！」と言うと、①ほくとも「ほんとうだ！
マル！」と二人はそのマルを喜んだ。



マルある！

ほんとうだ！
マル！

場面2 あぶくの マル

戸外遊び中、水の入ったタライにペットボトルを押し入れた時に、あぶくのマルが出てきた。それを見てそらやは①「マルがいっぱい！」と言った。翌日もそらやは②「みててね！マルがでてくるよ！」と友だちに見せ、③繰り返しあぶくのマルを作っていた。すると、④横にいたじょうじもあぶくのマルを作り始めた。二人は、おもしろがりペットボトルから出る大小いくつものあぶくのマルに喜びながら、繰り返し楽しんでた。



場面3 砂場の マル

砂場遊び中、型抜きをしていた①ひよりが「みて！マルいっぱい！」と言った。近くにいた③てんまも同じようにマルを作ろうとするが、カップを横スライドするため、④マルができず「あ？」と声をあげた。てんまは、ひよりのマルを作る姿にしばらく見入っていた。③その後も諦めずにてんまは、何度もカップを砂場にスライドさせたり、当てたりすることを繰り返した。そして、①てんまはマルを作ることに成功し「あっ！」と声をあげていた。



場面4 泡の マル

ハンドソープをつけ、丁寧に手をこすり合わせて洗っていたあやみは、突然①「マルマル♪」「マルマル♪」と歌い始めた。手洗い場にできた重なり合ったいくつもの泡のマルが、増えたり減ったりする様子をじっと見ていた。



①



①



①



①



③

場面5 ホースシャワーの マル

てんまとかなががホースシャワーで遊んでいた。①人工芝にシャワーをかけたところ、大小さまざまな形の泡が出てきた。するとかなとは①「マルあった!」と人工芝の上のできた泡に気づき、泡を手のひらでつぶすことにおもしろさを感じ楽しむ姿が見られた。③てんまはホースシャワーでマルをたくさん作ることに興味を示し、繰り返していた。

考察

そらの「マルある!」のつぶやきから「おもしろい」「おもしろそう」が広がり、子どもたちの中でマルを作る試行錯誤が始まった。そして、友だちがマルを作っているのを見て「自分も友だちと同じようにしたい!」などの目的が生まれる様子が見られた。実践することで1歳児ながらの疑問を抱き、マルを作るという結果を導き出していた。しかし、マルを完成させるためには手の感覚や手や指をコントロールする力が必要なため、発達面で難しい場面も見られた。それでも、自分の納得するマルを作るため、何度も繰り返し試す姿が見られた。

※子どもの名前は園の了承を得て表記しています

「科学する心」を感じた **小さなつぶやき**



3歳児

いろんな丸があるよ!

外遊び中、手を洗い濡れた手を乾かそうと手を振った時に、地面に水滴が落ち大小さまざまな丸い模様ができました。この様子を面白さを感じ、丸い模様を作るという遊びが生まれました。

実践の背景や全体像、園の先生による事例分析や考察は論文をお読みください。

